

年間第六主日

2012.2.12

マルコ 1・40-45

先週の福音では、安息日が終わった夕暮れにイエスが行われた数多くの奇跡のみ業が軽いタッチで語られていました。イエスのみ業が開始されたあのユダヤの安息日が明けた夕暮れに、町中の人々がイエスがおられるペトロの家の戸口に集って来たのでした。その人々は病人や悪霊にとり憑かれた者たちを皆イエスのもとに連れて来た先週の福音では語られていました。「イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人々を癒し、また多くの悪霊を追い出し、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。」このように語ることによって、マルコ福音書は、イエスのみ業が開始されたあの安息日と安息日が終わったその日の夕暮れの出来事を締めくくっています。このようにして始まったイエスのみ業は、安息日の翌日の早朝のイエスの祈りによって、新たな世界へと拡がって行きます。イエスを探して後を追って来た弟子たちにイエスは言われました。「近くの他の町や村へ行こう。そこでもわたしは宣教する。そのためにわたしは出てきたのである。」ペトロの家の戸口に押し寄せた奇跡を求める人々や、その人々の願いを取り次ごうとする弟子たちの求めを振り切るようにして、イエスは新たな世界へと進み進み行かれます。イエスが目指しておられるのは、近くの他の町や村に行って宣教することです。宣教すると訳されたことばは、神がイエスに託されたことを宣べ伝えるということです。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」イエスのみ業の開始を告げる、神がイエスに託されたこのことばを宣べ伝えることが、イエスにとって宣教するということなのです。「このためにわたしは出て来たのだ」とイエスは言われました。イエスがそのために出てきたのは、人々がそこに戻るように求めたペトロの家から出てきたということだけを言っておられるのではないかもしれません。むしろ、神のもとから私たちのこの世界に遣わされた神の子としての、イエスがあの早朝の祈りのうちに確認されたにちがいない、神から託されたイエスの使命全体を語るおことばとして受け止めるべきであるようにも思えます。

今日の福音は、そのようにして神が託された使命の道を進み行かれるイエスの前に身を投げ出した、名前も伝わっていない重い皮膚病を患っていた一人の人のイエスとの出会いにスポットライトをあてています。安息日の会堂で、悪

霊に取り憑かれていた人から悪霊を追い払い、ペトロの家の戸口で、病気や悪霊に苦しめられている多くの人々に癒しと救いをもたらされたイエスのみ業を語って来たマルコ福音書は、ここで、そのイエスに救いを求めて自分の方から近づいた一人の人に私たちの注意を向けさせようとしているかのようです。そのようにして、私たちをもイエスとの出会いに招こうとしているかのようです。今日の福音をそのような角度から味わいたいと思います。

福音書に一々書き記されないほどに多くの人々のイエスとの出会いがあったのです。その人々もイエスによって癒され救われたのです。そしてその多くの人々にも、今日の福音が語るような一人ひとりのイエスとの出会いの物語があったに違いありません。ここに集う私たち一人ひとりにも、ある意味で、イエスとの出会いとイエスによってもたらされた救いの物語があるはずなのです。

私たちもイエス・キリストを救い主と信じる教会と出会い、その教会の信仰の中に今も生きておられるイエス・キリストと出会った者たちだからです。私たちが受け入れたカトリック教会の信仰の中心には、十字架の死を越えて復活された私たちの主イエス・キリストが世の終わりまで、私たちとともにいてください。これが、私たちが受け入れたキリスト教の信仰の中核をなしている信仰の神秘です。

イエス・キリストを救い主と信じた人々の最初の教会において、その人々の手で書き記された福音書は、そのような私たちの信仰を前提としているのです。福音書に書き記された一人ひとりの人のイエスとの出会いの物語は、教会の信仰の中でそれを読む私たち自身のイエスとの出会いの物語なのだと思えることが出来る信仰を前提として語られているのです。そうでなければ、福音書に語られているイエスのみ業のすべては、それを読む人にとって自分とは関わりのない、とても信じがたいおとぎばなしに過ぎないものになってしまうことでしょう。イエスのみ業を語る福音書は、イエス・キリストへの信仰を生きる人々によって生み出され、イエス・キリストへの信仰を生きようとする人々のために書かれているのです。その信仰の中で、自分の方からイエスに近づき、イエスの前に身を投げ出した今日の福音が語る一人の人のエピソードは、それを読むイエス・キリストへの信仰を生きよとする全ての人々にとって、自分自身のイエスとの出会いを省みるための福音書からの呼びかけとなるのです。教会の信仰の中で大切に保存されて来た福音書とはそのような書物です。

今日の福音は、神が託された使命の道を進み行かれるイエスのもとに近づき、自らその御前に身を投げ出した一人の人の姿を私たちに示しています。彼は重

い皮膚病を患っていました。旧約聖書に基づくユダヤの掟では、そのようなことは決して許されることではありませんでした。重い皮膚病というその病のゆえに、彼は相手が誰であろうと、同じ病を患う者たち以外の人には自分の方から近づくことは出来なかったのです。この病に侵されて以来、深い悲しみの中で、彼はそのような掟の下に生きざるを得ないことを自覚していたはずでした。

「御心ならば、私を清くすることがお出来になります。」イエスの御前に身を投げ出したこの人はこのように嘆願しました。「御心ならば」とは、文字通りには、あなたがお望みになってくださればということです。彼がイエスに求めようとしたことは、もちろん、その病が癒されることだったに違いありません。けれども、彼はその重い病の苦しみの中で、自分の苦しみと悲しみの深みにあるものを見通すことが出来ていたのです。その病のゆえに、彼は自分が神の御前に立つことも、人々の集いにも加わることが出来ない汚れた者であることを自覚していたのです。そしてそれこそが、自分の深い悲しみの根源にあるものであることを見つめていたのです。それゆえに、彼は病が癒されることを願いながら、その根源からの嘆願をもって、イエスに清めていただくことを願ったのです。そのような願いをもって、彼は重い皮膚病という彼が抱えていた、彼でなければ分からない悲しみの底から、イエスに近づく全ての人に、イエスに求めるべき根源的な、全ての人に共通する願いが何であるかを示すことが出来たのです。彼はこの願いをもって、自分一個の苦しみと悲しみを担いつつ、イエスの御前に自分の汚れを清めていただくことを願う全ての人のシンボルとなることが出来たのです。それだけではありません。「あなたがお望みになってくだされば、私を清くして下さることが出来ます」と彼はイエスに願い求めたのです。自分の前に立つそのお方が、神そのものであるお方であることを彼は信じて疑わなかったのです。そして、彼のこの信仰は、イエスを信じる私たち全ての者のイエスに対する信仰を代弁することになったのです。

今日の福音が示すイエスのお姿は、清められることを願った彼が信じたとおりのお方であることを私たちに示しています。イエスは心の底から彼をあわれんでくださったのです。イエスのこの憐れみこそが神の真意なのです。神の御前に出ることが出来ない、汚れを持つ者とされていたこの人への神の想いは今や旧約の掟を越えて、深い憐れみに満ちて、イエスによってこの人にもたらされたのです。汚れた人に近づくだけでも汚れるとされていた旧約の掟を越えて、イエスは手を差し伸べて病み崩れた彼の体に触れてくださったのです。そのようにしてイエスはこの人の悲しみの根源に触れてくださり、自らも汚れを持つ者の悲しみをともに負ってくださったのです。そうすることによって、彼の汚

れを清めてくださったのです。

自らの汚れの悲しみを他の誰よりも知っていた、今日の福音のこの人は、どこから、あのようなイエスへの信仰を持つことが出来たのでしょうか。私たちに分かることは、彼はその深い悲しみの中で、その悲しみの根源を見つめ続けることによって真実イエスと出会ったということです。私たちもせめて、そのようなイエスとの出会いへの憧れを持ち続けたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高